

911.3  
八  
坤

流譜芭蕉波

坤



同俳諧と連まつてろへうあくやも日往の人も笑ひを飛  
あらすめらあとく至るはせきへそか上下を分ちゆく  
にまよじのいたるをもて百駄ふくとうろをほくまし  
ぬすまえり俳諧を假まに威をあらわす化けたりと  
お侍の上あくそお俳諧さんを用ひてはくいと  
まくとく一柄とくすまきを能筆にて松が山の北  
かじとくをあき將もて吉原ひをせんくらうのまき  
ハあくを放くはなれを力説すてこそあきをもててまく  
をめまくすむかくへんをもたうとせんをもく

丁

新に生様と我他物とあらむを知る能く能くをとれ  
一弓弓上のエト意念を物の後をさうりてすいとゆうす

筆、矢のくも、

新はうねの事もあ

一弓弓たまととくとさひの至るも上まへおのにまくはせも

和は弓くいうてふまきはめ上

あきあまくはくもまくはく

と弓弓ハ下下落つてけあひまうる上の弓下弓も

その弓弓とひくももて連系とし

あハシ弓弓も里おこを

（内矢弓の弓おこすとすと

筆、弓弓ハ弓弓弓弓弓弓

吾弓弓はちあうてんと

弓弓弓弓弓弓弓弓

ヒツヒツハ弓弓の弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓

ハ弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓

神とおも

同一弓弓ハ弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓

（弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓

その弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓

弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓弓

やくぬ底ありて 俗諺をも力く至るに似たり  
き事小説をもつてむかひておもひどく  
仰うておあひどく

たゞソノホーとちれ物を

とぞうす

たゞソノホーとぞうす

と薄よある人山の俗諺も取ては薄方をもまかて  
生みのんうり歩きそりを用ひの事くもや言ふ  
よしに附くと云へば連系をもむか  
りひすうと云う人のソリコムハ——おのハおとく

かとひく船を壁にあつて至れを

花子の如くや松本の芋ちま

とづらの俗諺不取そくとぞうハ芋の事とよ  
うきの事とよくとぞうを能役不取そく

白い水の水垣や内とも度一多毛内

とづらの俗諺の事とよくはと俗諺もあくをとぞ

内いきとほきひととくとよくとんのむしは外うらえ

とおもひ上うそ俗諺もとくとくとよくとよくと  
生みあひとくとくとくとよくとよくとよくとよくと

の生ぬと能りとくとくとよくとよくとよくとよくと

お外らゆ子供弱一とつうじめにさすくん俺弱う  
家とまくさんへがほれまくさん御弱う  
うそ子の抱をかくも俺弱う  
子供の抱うもあくもそな強弱うちんを至る俺弱を  
弱さん此候ハ能惜う歩あり風弱うと出うあうすつて  
ううれうと歩くん様へせうと以て俺弱うある人うち  
風弱を以て俺弱う歩く人ありは二ツ弱くうふてモ  
正義の弱子歩くん様うとせぬのは言ふれはいり  
走るうとちばのうあくハ云う凶吉エ風弱うと取  
歩うとハかる幸運の——脚あひ壁下あくりに

うちかくらむのくわオ朝五のくわうを出で人の脚をとみ  
至るうとくれを紗モ一體の外車うちんを用ひて、ね丸井  
とも幸うと幸うとあくも御弱あくん  
子ようとあし正弱弱うと歩く様子をうね  
うねうとくれを紗モ一體の御弱を待ちひき立つておほがく  
とハ御弱弱うと歩くと御弱うと歩くと御弱うと歩く  
に至てハ行うと御弱うと歩くと御弱うと歩くと御弱うと歩く  
とおうとおうとおうと

一見本草書序文と見えて於段中「御弱」を多用する

と御弱弱うと見えて於段中「御弱」を多用する

毛氏文で乾坤と五行を主徴とするものと云ふ  
一 泉水鬼貫赤武川、うにのとてとやか便庵子義を傍ひて  
義の先たの宝桂丸本ものもひせりてそんは白玉  
作もつまらぬ——とて  
すれども、嘗て桂丸本もありまつた。鬼貫  
と他ちの森の老爹北猿あらずありまつた。毛  
太翁とおのとをやまう二ノウラシアの森の内に  
せんじと色をアキマスる村山屋  
と云ふ字を鬼貫  
下をもよおしては、傳やつてある

と取立たり一向何ゆるかく染毛エおもひひとすむ也  
と作立むすりがんがとてスハシテとて毛口たて奉  
用傳毛をちくはれ、ノリとてアヒル種を鬼貫  
ニテ田ぶ野あわて馬あわてり  
と取立る毛えぐハナヘの邊にて橋をアシムて  
とまり一ものとアリたとて毛は、いたもあらず  
アヒル種を鬼貫

筆は一々ものと用ひの時、一枚も二三枚には  
あこへるまづらん物よからずを教わる事うなづく  
一ふれも極むきあらぬかゝりとのことえぞ鬼や我  
にゆきゆく

よろりおははもあくとまうう 正秀  
とゆきとせきを起したるをせかうてじきをくらう  
ニヤもかにあくゆくてもうへれむれやうふくへそ  
カランやうびとおきをきく場所をゆくまくゆくほま  
てのひうひはうヒテモお優得うそとゆくほま

傍晝りよひとねうあぢみ

是より多く云々一もさうにあくにこうほく  
ねのひぢうせうめう一の物あくそはねのく現生  
一とく衆を再び一とて曰ゆて能者を下すもの等と  
ありて、其の事は、日あふる山にて向  
うと、と色と色を取て、其の事もあらまは後う  
よむねのひとて、もうちさはうううに、うきこゆ  
を以うとすと、うきてのあく、あく、んく、あくす  
ゆうううと、うちあく、あく、んく、あくす

とすと、つゝきてのをあくよみかへりあけ

ゆゑと、つゝあくよみかへりあけ

あくよみかへりあけ

お匂を祝ひをさうてうるをあつしも一句に感應あり  
すてアラム人のおうち祝ひして聲のうるみあるおしゃる  
ことあとやおちほ「下山」——うきうまをきの里圓

事あとのお仙

ぬと這く蘇力中と蟻内身 沾圓

ヒツカトナ

ワチ桂を人うら出 とも 五 里圓  
とほくはうれふすによき着ふたてすうり——  
日はうれにかくはうり去て感合を——ぬと這  
蘇力うち北蟻ハテするもあく——ものいふとどく

筋力寒はとアシキモモ野熱とあくびぬくお匂の  
を返す蘇の體のまをほとひ少そらするは蟻  
形——五子

虫蟻の少ソケて猪多とあくまと 馬覓

とその垂を場手て風情とあくソケとおもとゑ  
あくソケとたゞ一夕をうぶかるははは蟻孔ち多  
のうねはくまやくあはるはる

一石 猪多——カムシモセ木 沾圓

種の少ソケと一石がアラム身安法也多モ多法が持根

と云ふ事は人を仕合せにすむの事すありがまく  
仕合せの事は人を仕合せにすむ事すありがまく  
あへて考へて見ゆる事すありがまく  
さうへんる人力長をもてて脚絆りよとね筋の筋と云ひ  
足をもつててにさうとぬと云ひ同筋筋を遣す筋の  
筋の筋ハ陽不羣とアラシトモトモトモトモトモト  
モトモトモトモトモトモトモトモトモトモトモト  
筋をもつててにさうとぬと云ひ同筋筋を遣す筋の  
筋をもつててにさうとぬと云ひ同筋筋を遣す筋の

の事と申すてはそれと先もやうじとをとてせ  
君の事と申すてはさういふ事もあらぬ感覚をも  
唐突にせり様よと云ふハナリをもんづれ男也  
ノセウムアリテハの先テモト一時にテ  
序経と大もととの体をねじる事多きうち度也  
アリト一言法華よと云ひ然て法經と初大もとえ  
列玉女にもかくもくくは唐例也アリヒシ小姓の経也  
を嘗めつたれどもアリト一もうととかといふハニモ  
身の自は無りと云ふて云ひんばおに大もともかくもくく  
あふ風情の仕事も下知がさむかと云ひて云ひんば

初にウタモリノヒミトが御内侍御ノアツシテ、御内侍  
ち風とああらゆをもす——はうはうと出でやる事  
のいろよき事も男に感念す——とくとく一匁半(かみ)き  
とて奥のゆゑを石乃(いしの)と云ひて人(ひと)にうつす  
はお——うう——はまもとやうにうが——もくく  
——そ一詩れ魂(こゝり)すむら(くわ)——砂を這ふ森の音  
の音(おと)を慕(うらが)ひてアキラムヒの人が——とす——を一筋  
きともあくまでも等(ひだり)——あとう音(おと)のまゝのとくも  
にゆくう——とくも——と音(おと)とあくまでも聲(こゑ)

とつてあり

にうへくともほりもあへ風雪

あんさんがかき立てるふる葉吹ふれ 松風  
と吹ふるふり びのむすめをもて自ら起無能  
立葉落葉と葉も一ノ片やたありますひよどり風雪耶  
病あと不ぞまち哉お死事とソケモニカシム志うも  
難 五白にらとゆう力ありきをまじへからずか  
先人のご祈福うとまへとまへ 一清福うよつとまへ  
ハシキ と色をだすまゆるやきのとソケイと形も

身 一白も性 一もつもうち力をゆく大モ生ひぬあひ  
とうすみのほり うの白みをひい事聲ともにひゆ  
他物うちもはりてうけつまへ 同きうもとへうや  
ゑ曰く 一白を指すとソケモニホモうもとセ  
聲をだすのをうみて名前をもて人に云せし 一白の首  
肌をあくちととの名前しまさかうとくの名前を共  
鳴をあくちとハねの聲をもとあくと逸音うそを口立  
一白をあくちとクジモトをうそを口立て族をあくと  
名前をもてうをうそを共に口立て族をあくと

身 一白をあくちと共に口立て族をあくと

おおむねうそでやうひたちと朝ナリと人にはうそを  
うそをうふかうの人やうそをうそとほきあつても

右是事力發後をかゝる事、保恤若不す可  
之至時、在乙未とテ、多毛秀郷而仰天也。

歐陽文忠公集

正秀

西紫弓をもとめあつたる御事とへづけの如く

と我を走りてまよひす。身も心もはまらぬ内  
うを擇ひ我心細といふ事もあらず。むしろ此の  
あらね。——已故貞祐以其子人への風神ありて家園を  
湯浴を以て東北に移す。我らはの湯浴をも御浴矣。  
まことうるうて身も心もまことに清々。——と云ひて  
乃。——あくまでもあり越人風氣ありて身も心も松の香  
たる者なり。——身も心もまことに清々。——と云ひて  
身も心も松の香。——身も心もまことに清々。——と云ひて  
そえ一章。而今たゞ。——と云ひて身も心も松の香。——  
りひて身も心もまことに清々。——と云ひて身も心も松の香。——  
りひて身も心もまことに清々。——と云ひて身も心も松の香。

大とぞ孤屋野坡。身も心もまことに清々。——と云ひて  
身も心もまことに清々。——と云ひて身も心もまことに清々。  
去哥半拾。——身も心もまことに清々。——と云ひて身も心もまことに清々。  
やれ。——而後猿葉とやんと擇ひかく。——と云ひて身も心  
もまことに清々。——と云ひて身も心もまことに清々。  
う。——身も心もまことに清々。——と云ひて身も心もまことに清々。  
う。——身も心もまことに清々。——と云ひて身も心もまことに清々。  
う。——身も心もまことに清々。——と云ひて身も心もまことに清々。  
う。——身も心もまことに清々。——と云ひて身も心もまことに清々。

風神を擧老の間に左體をすすめまことに  
廿一代まつ國ハナヒタミ栗小ぢうきる風神しまんちと  
古今トモ代とれ風神をあらざきはにそほ等入  
氣をもとく風神のまくはくもくもくもくと  
氣をもとく風神のまくはくもくもくと  
風神とも同源あらずもううすす直まのまほまみま  
風神とも同源あらずもううすす直まのまほまみま  
玉子毛のうれすとたちゑにひのはくとだらまく難  
とく難み  
先ちこ人のうれすとだらまく難み  
氣ぬむ一神極くうふをりとい風神ともむだくふあき  
集れまくと名づか難くはおあさくわまくとゆえく

風神と號詩をもあくもくの上を以著てニシ子ナルモ  
や向あううえ擧老をもねかぬきうそーとまとーー  
うれをもくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
佐乃弓をとくとおももあくんうおもとくとくとくとく  
弓よう弓くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
うれのうれをもくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
波瀬う波くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まことに此ハ能作力但多くあらずに以て首尾は甚だ悉くや  
はうむてゆゑに能作とちがへとおもふ者多く出来  
候る衆作のとはちがへぬと云ふ事無かりて化の人を  
かうじゆくを亦あらわす能作をほんたまこと穴巣はセ  
う一枝くらうかうねとおまかうと能作

先づ此の事に付く事もあらず  
邊の事本と詮往來す。すなはち其の事とて多くはあらむ  
ある事在る事のあらまきや又他物たまへよからぬ事にあら  
ハシテ是よりかくことの日向をも生一四年一月一  
ゑめ力能事ふ亦先づうれいかもしくよからずはうあらむ

口すふせんとそおむとくはるひのゆへおひき人のあかま事  
かゝてあらうむる人ね——すむ代のれを考へまつて  
か我とあらうて教きよむくとアモナリま風ニ一がとだそ  
うち人かあくとくはりてあらうて人ハハヤモモ尼るを  
生歎あよすむ人ね——とあはくあなびほほとやふるん  
とあもぞしかくわちねそへくも初めうえ上まであぢえを  
あはういづくおおきくとも足掛へてあひ風を失ひをひも

卷之二

十月八日

歸故鄉

ある時は枕を身にかゝらるる事無事と因縁ちて全番  
講究の機会を失ひ一月のうち又は多くはまんづのあ  
のとあるを嘗ふよとあつたまよと云ひゆけりそりアソシ  
トスルにあくに枕を、言ふがけてよりテ大ニ利キ  
たりと

一書より同或人の所引す

卷之三

とひらすありてはよるをかくすとて、  
きみの日をわざわざおもむきにまへ

おもての事もかうもどり、  
うなづかすとまことに、  
身の船はほんにあらへば下馬すとゆふと  
か何とおもひぬすが事、また人をあざめく  
あるありせん際の

尾とひよ里のいとこで種をう

トツラウアリカニシテキモトコトハ  
キの尾もひと往きあらんあらも種のか  
キツキナラヤトキの入るアレナリヤモルハ  
カニノサシを触るまゝの世人多く一

۱۰۷

か七日後其の事もさういふの聲とおもひやうなゆの日  
ハリナホ七日か一ヶ月もあらずたゞちゆ

京入やうめん田舎へ歸る中

とハ前句や是も先師遷化の翌年先師の墓にて  
御内作を一匁も志ひず。殊様書不加入へ。あるて之を  
之やち東日丁未も殊様書ハ先師遷化の年七月伊勢  
ノア修業。四足の板車生産の事ハ殊様土事とも  
近國にて一乗馬込ハ致し志ナリと有テアリ。口役ヤキレ  
ハシモトモ解ヒ難ヒ。トニシテ多シ江戸老岸儀家  
御内作を一匁も志ひず。諸事も亦同様

まことにあくままで、幸に暮ほの度極り此島來ゆ  
出立へと移ひ、御宿に移ひ、三日おもてあり難  
に、彦根守より、事も止み、一月、二年、乃  
ち、伊勢守で従様、はづかの一步あるを一二歩を  
て小歩ても生じてやとあつてもううきあつ  
序もあらず、旅へと移ひ、しづく坐る所玉野山寺  
を、猿の子を、種の木の森のねあつと、森沿ひの飛白  
ありて、日ちあらうと、是れと、河船あつて、三十六夜荷  
て、まだ向ひ、沿道、手五夕ハ、宿也志、うすと、持ふを

トテシタハ沾園の事カ一セテアリヒトニテ然ド先河ト  
アリハ云キ岩本義泰ヲトテ考怪矣モ既テ既テ出食也  
ナリトモカヘタハ力士のニ一ツナムトシテシテモ  
ルアリヤアリル又稽基子も然ルムアリ一役ナシテ  
エハナリテニモ稽核裏乃接取モ西かかく免モ上  
立委ルミサムル事ナリモテノモ御身御心に付シテ  
ト猿玉アリテ争ニ馬更寺四之助モ一堂アリシニシテ  
一社立ちアリシニテ後ナタ免原の仕事ハ降ルトシ  
四事ナタトモ十の半もアリシニシテ少伊豆スモアツ  
移ルナリトシテノ移産也トモアリニシテヤヌケヤ先

山の絶景をぢりと鳥あり身あり  
游遊もひりと遊まほらるる  
往来

ちくも先師遷化せまつてしとくも甚うむとかくも  
に教へ——是をきはおれのいふ——あくまでも  
おもてよどおる三人の後をあへせかきもとひくん  
集めをうかき考へて被そりゆゑもあへあくとも  
一派の事でやまくらうじゆくはも一はうてきくもひじ  
御作をあへ——あくまかがくもとお化すをも

一和七向義仲ち初下のまち角、おとに孤守ニシテ場之達  
絶す。トキニ左兵衛曰くふと其角破雪の行と書ひ候をも  
白もとと生を佑へる事無く、服ハ達の人もかすへ儲け  
所と枯れ木の木をもてて様感胸ヲせんう焉と  
考へて一生もくすりぬまゆに抱きよひふるをも根  
をすくうまく考ふるをし諾人志堅烈壯にて志士  
を胸子ほどのひ玉ほそモ義のまことにかくらむま角を  
七日おとし考へと游へて枯尾木の白ありおとくハシの下ノキ、  
のを考へておとくをもつてまことにかくらむ子孫の考證ニシテ

とち考に考をとる考に考の日は不と牛一より達成の事中  
詠名多取たのアリやもそくと來てお向へ先哲のノ意見  
お子の服とアスルとセリムの服は九句を考へ多作  
と語りどきお考ハテナは英才しからむこそアモ上手ハ年一ノル  
諸々芭蕉のアガシヤシアキモアサアハシモアシタモアシタ  
またお考と性後の考アリ特とも多くモニモニ種立  
カ文エテ古邊丸山の記アリ是魚日記エテ前立者之  
一和七日げ此嘆山事レソラオアアシテアシテアシテ  
芭角の山吹とおなじと諦ムエヌモトカ本様を諦ムモ  
先師を法イリモトアリ山風タタキアリモトヨリヤナギ葉日

と語りきちや考ハテナシ英才しからもこそアセ上手ホリ年ノ九  
漢ニ色菴のち於京シテ多モモテス不以多モテ名ナム  
主に主考とは假のおり候とも多くモニ主事候  
乃文、又長邊九山の記あり是を本ノ記也。考の如ニ者之  
一亦七日け以嘆山第レソルホトアリテレレ少少のち化少有ニ  
其角、山峰とふクマツリト端レヌ所モコト本様を端レモ  
先師を法イリモトアリテ瑞山、主あるまじが御子ニヤサル事也。



御心の事にあつては、何處かおもひ出で  
てゐるが、そのうちにもう少しを  
福とぞ思ひて、保まることを  
ありて、ほめられました。やがて、そとへ放

聖一修也が御身中のめでたしをもつて一當身を下にまわる  
船にてはまくとて日月のまたがり見るうらむくとみる  
ことをあらへて身をよせてもさすくらく身をもほ  
きこさむともぞもとものひくらんて地に御船を草つの  
風波もくとまつて身半の新風と風と云ふと云ふと  
身をもくとげりにゆうて身のすれ一風あまき山のあんち  
よまとあおひて身づくはせ山のあらはるくよもよも  
あらはる山の熱い山の身のあらはる山のあらはる山の  
かくとくはおた身のうつし身のうつし身のうつし身のう

燕談錄

明和乙酉余遊瓊浦過外尾氏後亭得國  
字之書無外簽且編首每書名余電鵬之  
則多芭蕉翁所下與諸門人論辨答述之語  
而卯匕所記也余心喜而好之譬如下舊塚  
得一周書魯壁得聖經也請之而歸藏諸巖  
中而秘之數十年矣尾藩竹有曰長秘此  
書而藏之埋金於土中投珠於海底之類

也，不，如，下，刻，之，而，利，人，之，烏，愈，也，余，信，彼，人，

之，言，焉，今，茲，遊，京，師，謀，薩，關，雙，使，書，肆，萬，

舍，梓，之，私，題，烏，芭，蕉，談，以，烏，後，生，之，寶，茂，

予，收，中，口，相，請，由，余，二，喜，而，

享，和，壬，戌，六，月，穀，且，題，于，平，安，客，舍，

東，肥，釋，文，曉，



芭，蕉，詩，



